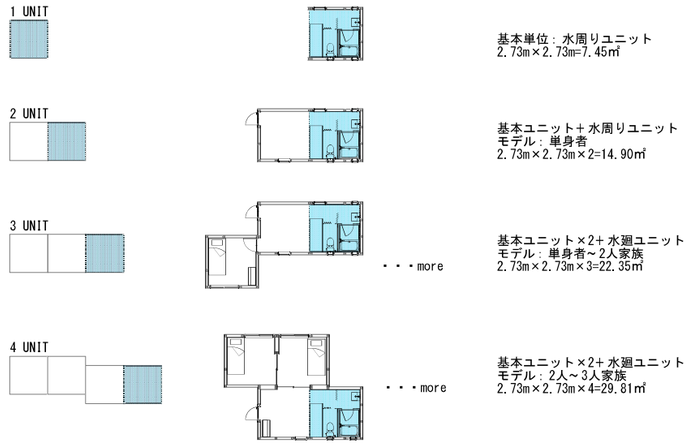
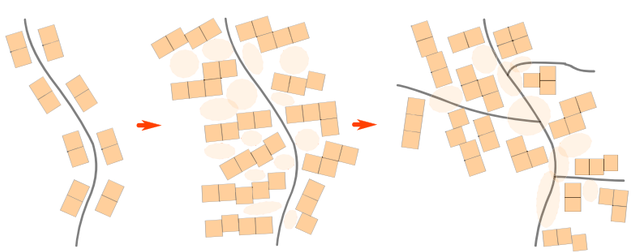
「住み慣れた地域の近くで」

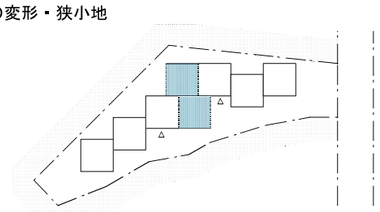
災害はそこに住む人々の日常を突然に奪い去ってしまいます。しかし、生活のよりどころは地域とコミュニティにあり、失われることはありません。仮設住宅を住み慣れた地域から離して建てることは、生活の基盤を取り戻そうとする人々から目標を遠ざけてしまうのではないでしょうか。
本提案は住み慣れた地域の近くで見つけられる小さな空間でも建設が可能であることを目標に計画しました。市街地・農地・山林を問わず、住み慣れた地域付近の道路（農道や里道）沿いの様々な空地を敷地に想定した仮設住宅です。囲われた土地で密集して住むことになる中・大規模の仮設住宅群に比べ、道を中心に広がる空間はストレスが少ない環境と考えます。
居住のイメージは海草です。太い茎のように通る道と葉脈のように広がる居住空間が一つの居住群をつくり、環境の変化にも揺れながら受け流すことができます。居住群はそれぞれが独立しながらしっかりと地域に根差し、繋がっています。





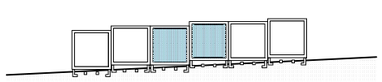
道路は移動の目的だけでなくインフラの幹となります。
道路の先に住み慣れた地域があり、繋がっている事が心の支えとなります
ユニットのずれにより生まれた「間」は居住群に変化と余裕を生み出します

〇変形・狭小地



小さく分けられたユニットを組み合わせることにより
狭小・変形の土地でも建設が可能です

〇傾斜



敷地は平らであることが望ましいですが、ユニットごとに
自立しているので、勾配や段差のある敷地にも対応できます

- ■ 1ユニットは2.73m×2.73m（四畳半）の正方形です。短辺が4m以上の土地であれば建設可能です
- ■ 各ユニットは水平、垂直にずれながら接続ができ、狭小、変形、勾配などの地形にも順応します
- ■ ユニットがズレることにより生まれたスペースが道路や他住居とのあいだの「間」となり、生活に必要なバッファーゾーン（緩衝帯）を作ります。バッファゾーンは風除やコミュニティの、また設備や駐車スペースにもなります。大規模な仮設住宅群の場合にも、同様に必要な「間」になります
- ■ 部材は種類を少なくしダウンサイズすることで、現場での取り回しと他部位への転用が可能です
- ■ 部材接合は金物を使い単純化し、専門職以外の参加を可能にしています
- ■ 内外装・サッシ・設備機器等は現地調達が可能であるか、もしくは転用の可能な材料を選びます
- ■ 1ユニットを先行して建設し、慣れたところで他のユニットを連結建設することも可能です
- ■ ユニットは独立して集合しており、住み手や生活が変化する際に住戸間の壁位置を移動できます
- ■ ユニットの組み合わせにより、非住宅への展開が可能です
- ■ 仮設の役目が終わる時にユニット毎に分割し、作業小屋・倉庫などへの再利用を募る事が出来ます
- ■ 自治体が年単位で木造仮設住宅ユニットをストックし、払い下げを含めた循環を目標とします